
富士五湖自然首都圏フォーラム 学生アート交流 カリフォルニア州派遣事業 報告書(R7 年度)

山梨県 新価値・地域創造推進局
国際戦略・自然首都圏推進課 富士五湖自然首都圏推進担当



事業概要

1. 事業の目的

アートや社会貢献、国際交流等に関心を持つ学生が、富士五湖自然首都圏フォーラムとして連携しているカリフォルニア州を訪問し、現地での共同アート制作、交流体験を通じて、人材育成につなげるとともに、カリフォルニア州との友好関係の持続的な発展に寄与することを目的とする。

2. 日程

- 日 程: 2025年11月21日(金)～11月26日(水)
- 参加者: 横山剣士郎(大学 4 年)、平田碧(専門学校2年)、乙部ほの花(高校 2 年)、鈴木啓史(高校 2 年)、市川愛菜(高校 2 年)、瀬戸あゆか(高校 3 年)、川内ひまり(高校 2 年)
※ そのほか、山梨県のプログラムに賛同した学校法人 21 世紀アカデメイアが、学校活動として 10 名の学生を同日程で派遣
- 場 所: アメリカ合衆国カリフォルニア州アーバイン市、ラグナビーチ市
- 内 容: ① 共同アートの制作(17 人を A～D の 4 チームに分けて実施)
② 自身の作品をギャラリーに展示し、現地の方々に紹介
③ 現地アート・アーティスト活動の視察
④ 学生やアーティスト、行政関係者など現地の方々との国際交流
- 行 程:

日程	主な活動内容
9/6(土)	● 事前学習会 ➢ チームづくりと共同アート制作に向けた準備
9/13(土)	
11/21(金)	● オリエンテーション
11/22(土)	● 共同アート制作と来場者との交流 ➢ 班ごとにアート制作作業。作業風景を見学に来た来場者と交流
11/23(日)	● ラグナ・アートミュージアムでの展示会と地元住民との交流 ➢ 「Fuji California Young Artist Expo」の応募作品を展示。美術館の来場者に自身の作品を紹介するなど、交流 ● ラグナビーチ市内の視察 ➢ 現地の芸術祭の訪問や高校でのコンサート鑑賞など
11/24(月)	● 作品発表会 ➢ 制作した作品について、班ごとに英語でプレゼンテーション 現地の芸術関係者の方々や、来場いただいたラグナヒルズ市長、ラグナビーチ副市長から講評をいただく ● リフレクション ➢ 取り組みを通じて感じた課題や反省点を仲間と共有
11/25(火)	● 移動日
11/26(水)	● 帰国

横山 剣士（大学 4 年生）

「平和・優しさ・協力」。募集要項に掲げられたこのテーマを見たとき、私は迷うことなく応募を決意しました。不安定な情勢が続く現代社会において、これほど重要かつ探求しがいのあるテーマはないと確信したからです。「アートはグローバル社会の共通言語である」という本事業の理念は、私が追求する理想そのものであり、「山梨とカリフォルニアの友好の架け橋になる」という志を持って臨んだ現地活動は、想像を遥かに超える学びの場となりました。

ラグナ美術館での展示会では、現地の美術講師の方より「あなたの絵からは『予感』を感じる」との言葉をいただきました。これは、私の作品に込めた自然の物語やメッセージが、言葉の壁を越えて伝わった確かな証であると感じています。アートという共通言語が、魂の深い部分での共鳴を可能にすることを実体験として学びました。

滞在中、最も感銘を受けたのは、時空を超えて循環する「善意」の存在です。現地のクリエイターの方が、かつて日本で受けた恩を返す形で、私たちアンバサダーを自宅へ招き、温かくもてなしてくださいました。善意が喜びのエネルギーとなって過去から未来へと循環し、人と人との繋いでいく様を目の当たりにし、今回の派遣活動もまた未来の平和の種として芽吹くことを確信しました。

現地制作では「一期一会」をコンセプトに、相合傘をモチーフとした共同制作を行いました。メンバーと共に作品を創り上げるプロセスそのものが、本事業のテーマである「平和・優しさ・協力」の実践であったと強く感じています。

また、現地の方の「異なっているからこそリスペクトできる」という言葉も大きな収穫でした。多様性を分断の壁ではなく、興味深い個性として捉える姿勢は、現代社会を生き抜くための重要な知恵です。日本の教育現場においても、多様な文化的背景を持つ子どもたちの増加や、インクルーシブ教育の推進により、教室の多様化が進んでいます。今回の学びを糧に、異なる背景を持つ子どもたちが互いを尊重し合える教育環境づくりに向け、来春からの教職大学院での学び、そして将来の教育活動や地域活性化活動へと還元していきます。

「違いを認め合う大切さ」や「表現する喜び」を次世代に伝え、子どもたちが自分らしく輝ける平和な世界の実現に向け、全力を尽くします。

このような貴重な機会をくださった関係者の皆様に深く感謝申し上げます。今後もアートを通じて希望を届け、「平和・優しさ・協力」をテーマに社会に貢献できるよう精進してまいります。



平田 碧(専門学校 2年生)

今回、カリフォルニアで行われたアート交流事業に参加し、私が最も強く感じたことは「挑戦することの大切さ」です。これまで私は、自分の得意な分野や慣れている表現方法を中心に取り組むことが多く、無意識のうちにそれ以外の分野に踏み出すことを避けていました。しかしこの事業を通して、得意分野以外のことにも進んで挑戦してみることの重要性に気づきました。実際に挑戦してみなければ、それが自分に合っているかどうかは分からないし、仮に合っていないと感じたとしても、その経験を自分の判断だけで簡単に切り捨ててしまうべきではないと思うようになりました。挑戦の過程そのものが、新しい視点や気づきを与えてくれるからです。

また、自分とは異なる背景や価値観を持ち、さまざまな分野に取り組んでいる学生たちと共に作品

制作や交流を行ったことで、「こんな考え方もあるのか」と感じる場面が何度もありました。一つの作品に対しても解釈やアプローチは人それぞれであり、多様な考え方で触れることで、自分の視野が大きく広がったと感じています。

さらに、この事業を通して、英語を話すことの重要性を強く実感しました。私は英語を十分に話すことができず、思っていることをうまく伝えられない場面が多くありました。その一方で、英語で積極的にコミュニケーションを取る学生たちを見て、英語を話することで交流の幅が大きく広がることを実感し、自分も英語を話せるようになりたいと強く思いました。

この事業で得た学びや経験を、これから自分の制作や進路に活かし、恐れずに新しいことへ挑戦していきたいです。



乙部 ほの花（高校2年生）

私が今回の旅を通して一番感じたのは、自分のことを過小評価し過ぎていたことです。

美術館では、今まで会ったこともない方が私の前で作品を撮って下さりました。

作品制作の日に訪れた方がずっと私の制作風景を見て下さり、あなたの絵が好きだと率直なお褒めの言葉を頂きました。

私のチームの皆さんも、自分以外の人の個性もそれぞれ考慮し、私の作品も例外なくリスペクトして下さいました。

国籍も違う見ず知らずの同年代の人達と会話が弾み、名前も知らないのに絵が上手だと褒めてくれました。

私は普段から美術を学ぶ為の学校に通っている為、努力しても上手く結果が出ないことや、結局個性を出すことなんて不利にしかならないと考えている節もありました。

自分が作りたいものが、悪い意味で段々とデザイン的なものに変化してしまい、「こうすれば評価が受けられる」「こうすればもっと見やすい」「こうすればもっと人が注目する」と、執拗に考え出すようになってしまいました。いい言葉にも聞こえますが、悪く言えばアートをタブー視したような思考があまりにも脳をしばっていました。正直なところ、旅に行く前にはほぼ筆を握れないような日もありました。

しかし、この旅で出会った人達を見て、私は少なからず自信を持っていいし、それに値する人間であることを沢山証明して貰ったなと思いました。

美術館で色々な作品が飾られる中、私の作品の前でシャッターを切って下さった方がいる。それだけでその作品を作った甲斐があるなど本当に思いました。私の考え方や、私の思ったことを、誰かが見て、キャプションも読まず勝手に解釈してくれることが、私が考える最高の芸術だと思います。

アートに必要なことは、表現者の自由さと観客の傲慢さだと思います。「芸術は爆発だ！」なんて言いますが、その爆発を迷惑だと思うのか、花火の様だと見惚れるのかは観客が決めて良いし、それがアートの良さなのだと改めて気付くことが出来ました。

これからは自分のしたいことに自信を持って、作品を制作していきたいです。

この度はお世話になりました。本当にありがとうございます。



鈴木 啓史（高校2年生）

今回のアメリカでの学生アート交流は、僕にとって非常に刺激的で忘れられない経験となりました。まずとても印象に残ったのは、日本との生活の差に驚きました。飲み物のカップは日本の倍ほどのサイズがあり、車も非常に大きく、街全体が日本より数サイズ大きいように感じました。一つひとつの物の大きさから、文化の違いを明確に感じることができました。また、審査員の方のお宅に訪問し、夕食をご馳走していただいた際には、日本では見たことのないほどの立派なお宅に驚かされました。ご馳走していただいたご飯もとてもおいしく、僕達のことを温かく迎えてくださり、文化の違いを超えた交流ができたと思います。

さらに、訪れたラグナビーチ市が「アートの町」であったこともとても印象的でした。海辺でキャンバスを広げ、波打つビーチの風景画を描いている人の姿はとても新鮮でつい見入ってしまいました。芸術が身近にある場所であることを目で見て実感することができました。日本では美術館や教室で絵を描くことが多いですが、アーバイン市ではそれぞれが自分の考えを持ち、自分のスタイルで行動、表現していると感じました。

今回の交流を通じて学んだことは数多くあります。その中で最も大きな学びは、「アートが言語を超えて人と人をつなぐ力を持っている」ということです。言葉が十分に通じなくても、作品を通じて互いの思いや感性を共有できる場面が多くありました。改めて、芸術の素晴らしさを実感しました。

また、「仲間と協力することの大切さ」も強く感じました。異なる分野の人々が集まることで多様な意見が生まれ、それぞれの技術を活かしながら一つの作品や活動を形にしていく過程には、協力することでしか得られない楽しさがありました。一人の力だけではできなかったことを仲間がいたことで成し遂げられたことは、今後の人生においても忘れない教訓になると思います。



この短い期間でしたが、今回のこの経験を思い出だけにせず、僕自身の成長につながる貴重な財産となりました。文化の違いを体感し、芸術の力を再確認し、仲間と協力する喜びを知ったこの交流を、これから的人生に活かしていきたいと思います。

市川 愛菜（高校 2 年生）

私は今回のカリフォルニア州派遣事業に参加したことで、自分自身が大きく成長できたと感じています。その成長は、ただ「旅行として」ではなく「目的を持って」海外で過ごせたからこそ得られたものなのだと思います。なぜなら、私はこの事業でただの旅行や日常生活では経験できない達成感や、目標があったからこそその体験と感情を味わうことができたからです。

特に初めて海外を訪れ様々な体験をしていく中で、事業に参加する前と後とで捉え方が変わったことがあります。それは、他者とのコミュニケーションについてです。私は普段友達と会話をする際あまり自分から話題を振ったり広げたりせず、相手の話に相槌を打つことが多い性格です。しかし初対面の相手との会話は相槌だけでは成立しませんし、言葉がわからない・通じなくても現地の方と話さなければならぬ場面もあります。渡航後しばらくはチームの仲間に自分の気持ちや意見をなかなか言い出せず、現地の方と話すときには頭が真っ白になってしまふこともありました。それでも色々な人と会話を重ねていくうちに、段々と「会話だけがコミュニケーションではない」ということに気づかされました。表情やジェスチャー、雰囲気だけでも相手からの気持ちは読み取ることができ自分の気持ちは伝えられえることを、身をもって理解できたからです。他者とのコミュニケーションの難しさと大切さについて、海外という環境だからこそ改めて気づくことができたのだと思います。

そして、仲間と共同で作品制作をするという貴重な経験から多くの学びを得られました。初めは一人一人とのコミュニケーションはもちろん、それぞれの得意分野や持ち味の活かし方や制作の段取りなど、チームとしての課題も多くありました。数日間でそれらの課題を最終的にすべて解消できたわけではありません。けれども、解消する努力の過程でチームの団結力は強まり親睦も深められたと思います。今までの人間関係のどれとも違う「仲間」という存在は、私にとってかけがえのない存在となりました。この事業に参加していなければ出会うこと

のなかつた方々との出会いによって、自分の視野が広がったと感じています。

私は、この事業に参加できて良かったと心から思っています。海外という環境や様々な人との出会いは、私にとってどれも新鮮で唯一無二の経験でした。今回得た学びや制作を通して感じた達成感、後悔や失敗もすべて忘れずに今後の人生の糧としていきたいです。



瀬戸 あゆか(高校3年生)

学生アート交流カリフォルニア州派遣事業を通して、私はたくさんのこと学び、自分自身を大きく変えることができました。

最初は、知らない人たちと班を作りて作品制作や現地で行動を共にするということに緊張や不安を覚えていましたが、班でのミーティングを重ねるうちにお互いのことを知り、このDチームならいい作品を作り上げることができると思えるようになりました。

実際現地に行き、作品を作る時に1日で終わるかと不安な部分もありましたが、しっかりミーティングを行ってきたのでスムーズに作業を終わらせることができました。作品作りだけでなく、現地の方と英語で会話する場面もあり、短期間の間で英語力やコミュニケーション力につけることができました。

このプロジェクトに参加する前の私だったら、完璧に話せもしない英語を使ってわざわざ自分から話しかけに行こうとは思わないし、笑顔でいる時間が少なかったのですが、このプロジェクトに参加し、自ら積極的に現地の方に話しかけに行くようになり、笑顔でいる時間が増えました。そのきっかけとして、美術館で自分が描いた絵を現地の人に英語で紹介する時に、他のアンバサダーの女の子がジェスチャーなどを使って何とか伝えようとしているところを見て、私もやってみようと思いました。その結果、自分が思っていた以上よりも伝えることができ、英語で話す楽しさや会話をする楽しさを知ることができました。さらに、現地の人に”She looks happy every day”と言われた時はとても嬉しかったです。この経験から、ビクビクしてなるべく話さないようにするのではなく、どんどん自分から話しかけに行き、英語を話せなくても何とかして伝えようとすることと、笑顔で話すことがいかに大切かを学びました。

反省会では、作品作りをした上で班と個人の反省会をチームごとに分かれて行いました。この反省会では、自分の素直な気持ちをぶつけた反省会で、涙を流しながら自分の思いを話す人もいれば、自分の性格について反省する人もおり、私みたいに不満や苛立ちがあったことを素直に話す人もいました。この反省会は、お互いのことをもっとよく知る機会にもなり、今まで行ってきた反省会とは違う質の高い、充実した反省会でした。



このプロジェクトに参加できたことは、学びを増やす機会にもなり自分自身を大きく変える機会にもなりました。さらに、高校生だけでなく大学生もいたので年上の人との関わり方も学ぶことができました。私は来年で大学生になりますが、ぜひまたこの素晴らしいプロジェクトに参加させていただきたいと思っています。

川内 ひまり(高校2年生)

今回の事業を通して私は大きく変わった気がします。

一つ目として自分の作品を現地の人に直接英語でプレゼンし、積極的にコミュニケーションをとったことです。私自身、英語はほとんど喋れないけれど、思い付く単語で自分の作品の趣旨を伝え、なんとか理解してもらえたときは、国境を超えてアートで繋がり、感動を与えられると肌で感じました。今回、行く前から自分のテーマでもあった「現地の人に積極的に自分から声をかける！」ということ、それができたこともよかったです。ラグナヒルズの市長さんとお話をした時、私のカタコトの英語を最後まで笑顔で聞いてくださいり、言葉が通じた時、会話が成り立った時は、とても嬉しかったです。

二つ目として、みんなとアート作品を作り、現地の人と交流をした時、自分の常識が当たり前ではないことに気づきました。私にとっては普通のことが他の人にとっては違い、文化や価値観の違いを肌で感じました。いろいろな人がいて、それが当たり前で、交流を通して私自身足りなかった部分を改めて気付かされました。

三つ目として、アンソニーさんの「失敗してもポジティブにとらえる。ネガティブにとらえない。1秒1秒大切にし、現実を見ながら生きる。」、イヴァさんの「失敗してもポジティブにとらえる。自分に与えてくれたチャンス全てにおいて感謝する。嫌でも捨てないで自分の横に置いといて捨てない。そこには可能性がある。」その言葉がとても響きました。この事業に参加する前は、自分には明日があるからと言って1日、1秒を大切にしないで、なんとなく過ごしてきました。でも、今回みんなとアートを制作し、その大きさがわりました。今日は、もう二度と戻ってこないし、ここで得るこの瞬間の人間関係、友情、感情を明日に伸ばしていたら今日という日が無駄になると思いました。みんなとはこの5日間しか会えないし、1秒1秒大切にしなければ意味がないと思いました。それはこの5日間だけでなく、自身の生活にもいえることです。深く考えず前は淡々と過ごしてきましたが、今回の経験や、二人からの言葉を聞いて改めて毎日大切にしようと思いました。

最後に、この事業に参加させていただき、コミュニケーション、仲間とのアート制作の経験、アンソニーさんやイヴァさんの言葉が自分の将来を踏み出すきっかけになりました。私はグラフィックデザインで海外ミュージシャンとコラボしたい。それを後押ししてくれるのは、今回の仲間との経験やアンソニーさん、イヴァさんの言葉だと思います。

ポジティブに、この経験を生かして頑張りたいと思います。



各班の制作アート



A班作品「一期一会」



B班作品「One Sky, Many Hearts」



C班作品「合掌」



D班作品「Small hand strength」